

一二六 清明を試みる僧の事「卷十一・三」

昔、清明せいめいが土御門つちみかどの家に、老白しらみたる老僧来たりぬ。了すの終止十歳ばかりなる童部二人具し

たり。存続たり終止清明「なにぞの人にておはするぞ」と問へば、「播磨の国の者にて候。丁寧語陰陽師を習

はん心ざし断定なり連用にて候。此道に、殊にすぐれておはしますよしを承はりて、少々習ひ参らせ

んとて、参りたるなり」といへば、清明が思ふやう、この法師は、かしこき者係助詞にこそある

めれ。推量めり終止われを試みんとてきたる者なり、それにわろく見えてはわろかるべし、この法

師すこしひきまきまぐらんもてあそぼうと思ひて、共なる童部は、式神をつかひてきたる断定なり連体なめりか

し、式神ならば召し隠せと、心の中に念じて、袖の内にて印をむすびて、ひそかに呪じゅをと

ふ。さて法師にいふやう、「とく帰り給ひね。強意の命令のちによき日して、習はんとしたまはん婉曲な連体

事どもは、教へ奉らん謙讓語」といへば、法師「あら、貴と」といひて、手をすりて額にあてて、

たちはしりぬ。

いまは去ぬらんと思ふに、法師とまりて、さるべき所々、車宿などのぞきありきて、又ま

へによりきていふやう、「この供に候了つ連体ひつる童の、二人ながら失ひて候、それ給およこしになるはり

て帰らん」といへば、清明「御坊は、希有めったなのこといふ御坊かな。清明は何の故に、人の供な

らん者をば、とらんずるぞ推量むす連体」といへり。法師のいふやう、「さらにあが君、おほきなる理り

候。さりながら、たゞゆるし給はらん」とわびければ、「よしよし、御坊相手への尊敬語の、人の心み

んとて、式神つかひてくるが、うらやましきを、こと妙だとにおぼえつるが、異人をこそ、さや

うには試み給はめ。清明をば、いかでさること、し給ふべき」といひて、物よむやうにして、しばしばかりありければ、外の方より童二人ながら走り入りて、法師のまへに出来ければ、その折、法師の申すやう、「実に試み申しつるなり。使ふことはやすく候。今よりは、ひとへに御弟子になりて候はん」といひて、ふところより、名簿<sup>みやづか</sup>ひきいでて、とらせけり。

一二七 清明かへる殺す事「卷十一・三付」

この清明、あるとき、広沢の僧正の御房に参りて、もの申しうけたまはりけるあひだ、若僧どもの、清明にいふやう、「式神を使ひ給ふなるは、たちまちに人をば殺し給ふや」といひければ、「やすくはえ殺さじ。力をいれて殺してん」といふ。「さて虫などをば、少しのことせんに、かならず殺しつべし<sup>強意つ+推量べし</sup>。さて生くるやう<sup>3</sup>を知らねば、罪を得つべければ、さやうのこと、よしなし<sup>意味がない</sup>」といふほどに、庭にかはづの出できて、五六ばかり躍りて、池のかたさまへ行きけるを、「あれひとつ、さらば殺し給へ。試みん」と、僧のいひければ、「罪をつくり給ふ御坊かな。されども試み給へば、殺して見せ奉らん」とて、草の葉をつみきりて、物を誦<sup>よ</sup>むやうにして、かへるのかたへ投げやりければ、その草の葉の、かへるの上にかゝりければ、かへる、まひらにひしげて、死にたりけり。これをみて、僧どもの色かはりて、おそろしと思ひけり。

家の中に人なき折りは、この式神をつかひける<sup>断定なり連用</sup>にや<sup>結び省略(あらむ)</sup>、人もなきに<sup>逆接</sup>、蔀<sup>しとみ</sup>をあげおろし、門をさし<sup>1</sup>などしけり。

<sup>2</sup> 履歴書のようなもので、主従のあかし。

<sup>3</sup> 生かす(生き返らせる)方法。